

会員の広場

俳誌「漆の実」近況について

主宰 鈴木 淳一

俳誌「漆の実」もこの十一月で通巻六十二号。二〇〇七年一月、上野文化会館4F応接室で僅か五名の有志で産声を上げ十一年。欠号も欠会も一回もないのが自慢。現在句会場は、毎月、都内、田町駅前田町イノベーショナルセンタ4F。午後十二時三十分～午後四時まで。初心者も是非ご参加を。

改めてこの一年を振り返れば、「漆の実」編集発行人の中川はじめさんが昨年十一月二十九日急逝されたこと。ここに中川さんの遺句ともいべき「漆の実」十二月号の五句より一句を抽出して、はじめさんのご冥福を祈りたい。

〈小半時綿虫どこへ行ったやら〉はじめ

十二月号の私の特選句であった。古風な時間の呼びか

けで、綿虫の安否を気づかっている気配が、短い詩情で包まれている。

※全会員のこの一年の作品を「漆の実」より私が五句抽出。是非ご鑑賞を。

漆の実（十句）

鈴木 淳一

追悼 中川はじめさんへ（一句）

漆の実春待ちきれず光り墮つ

クリスマス地下鉄通路長すぎる

たそがれて猫柳ほど見栄っぱり

グランドに白線引かれ寒明ける

東風の駅背凭れのなきベンチかな

桜前線ござ一枚の時間かな

どぶ河に風船ながれ映画「終」

プラネタリウム出る銀漢どつと来る

丸ビルの正面受けカンナ映ゆ

満月や山ノ手線の円周率

小山八州史

中川はじめさん追悼（一句）

冬月へ一人乗りゆく樞かな

鮫鰈の吊られ総身の力抜き

鮫鰈の腹這ふ前へ糶移る

水洩や肉餠割ればハマの湯気

炸裂の雷や雨粒まだ落ちず

下條 怡生

追悼 はじめ氏（二句）

逝く水の声聴く年の瀬の速み

漆木の言葉光らせ一葉散り

青空や鼓動地に来る揚ひばり

まほろば吟行（一句）

廃線となりし峠の木下闇

乱れ飛ぶ電波空間糸蜻蛉

池田弁之助

追悼 中川はじめ氏（一句）

冬の星元麻布へと歩き継ぐ

水洩や古地図を覗く周平展

やはらかく踏む再開の春の土

神の留守出雲蕎麦屋に立ち寄りぬ

綿虫に老い先をおまかせします

片山 丹波

青葉風地より湧き出るサキソフォン

著凝の琥珀を添へし朝の膳

絵馬の字はいずれも楷書梅真白

接岸の大型船から春日傘

山菜莢の花のさがけ津輕富士

登坂かりん

越後獅子雪の津南を越え来しか

夕空にルビ振りしごと燕来る

中振袖に風朶ませ卒業す

祖母風の春の日傘も松坂屋

医院行く角地の窪み春落葉

太田 甘美

シャボン玉五線譜にのり音となる

チューリップ赤が一番先に咲き

神の留守内なる神に気付くとき
綿虫や何掴まんと背負いし子
父の顔知らぬ従兄弟の終戦日

濱田 扇風

ライブ果つところに熱き冬の雨
エアメール春一番に乗せてだす
ヴェルレーヌ詩集片隅の雲母虫
大見得を切って川鶉の孤独かな
山百合のひらく気配の夜道かな

松原 薰子

冬の夜時のすき間にじつという
貴婦人の鼻水を拭く仕草かな
冬の夜や星座をつなぐ線見えず
弾む声空いっぱいのしゃぼん玉
いつまでもマドンナであり春日傘

佐野 真

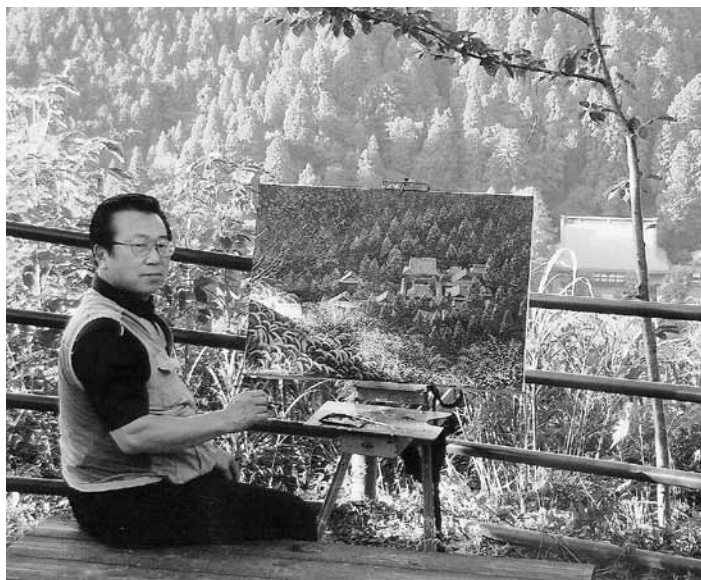
わが爪のふてぶてしさよ冬の雨
向き合いて鼻水の音だけとなる

シタールを抱える妻や冬の夜
黒と黄のマツモトキヨシ春疾風
秋暑しビオラの揺るる少女の背

松坂 六義

永平寺本堂覆る天の川
冬の夜のツリーリング前のオートバイ
七五ななはんの黒装束や緋のマフラー
日本海潮騒高し神無月
夜間工事水洩拭いてるドラムの火





愛宕山より永平寺全景を描く 沖津信也氏

日展（日本美術展覧会）入選作品紹介

洋画家・沖津信也氏プロフィール

一九四七年米沢市生まれ。米沢興譲館高校・山形大学教育学部卒業後、県内中学校の美術教諭。

校長時代「もう一つの卒業証書」として卒業生の似顔絵を総計八五〇点描いて保護者に贈呈した。

七七年一水会（本部さいたま市）展に「民家残雪」で初入選、以来十回入選。現在一水会会友。

八八年第二十回日展に「斜平山夕照」で初入選、以来二〇一七年まで十三回入選。最近作として、

一六年「峠・光る雪」一七年「晴れゆく峠」現在日展会友。

二〇〇三年ルーブル美術館「美の革命展」に「夕照最上川」でグランプリ受賞。

〇三年ル・サロン展に「陽は昇る」で初入選。以来連続入選。

〇六年ル・サロン展永久会員。

一一年一水会展に「鎮魂の海二〇一一」で小山敬三奨励賞受賞。

一五年白日会（本部東京）展入選。

一六年白日会会友。



改組 新 第3回日展2016 入選 峠・光る雪



改組 新 第4回日展2017 入選 晴れゆく峠